

令和2年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢北陵高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
1 「時を守り、場を清め、礼を正す」をスローガンに掲げ、生徒が自ら実践できるように粘り強く働きかける。	① 時間厳守の指導を徹底し、遅刻・欠席者数の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	学年あたり1年間の皆出席者数が A 80人以上であった B 60人以上～80人未満であった C 40人以上～60人未満であった D 40人未満であった	皆出席者数 1年 69人 2年 45人 3年 42人 平均 52人 C	皆出席者は昨年度と同程度である。次年度も引き続き、時間管理と体調管理についての指導を続け、健康面を含めて自己管理ができるよう努めていきたい。
		自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	AとBの合計 生徒 83% 保護者 86% 教員 54%	生徒や保護者の意識と教職員の意識に大きな隔りがあるものの、学校再開以降、生徒に挨拶の大切さを指導しており、元気に挨拶をしている生徒は多い。引き続き、教職員も含めあいさつの励行に取り組みたい。
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	北陵生は頭髪・服装容儀やマナーなどについて A よく守っている B だいたい守っている C あまり守っていない D ほとんど守っていない	AとBの合計 生徒 92% 保護者 90% 教員 46%	ほとんどの生徒の頭髪や服装などは良好である。生徒指導課を中心に、教員、保護者の共通理解のもと、教員全体で指導にあたりたい。
		③ 生徒を注意深く見守り、面接や保護者との連絡をより密にし、生徒理解を深める。	生徒理解に心がけ、不注意な行動の未然防止に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない	AとBの合計 教員 92%
	生徒のいじめ等の早期発見や早期対応に努めている。 A よくできている B だいたいできている C 十分できていない D ほとんどできていない		AとBの合計 教員 96%	いじめに関し、教員は生徒が示す小さなサインを見逃すことのないよう努めている。また、保護者との連絡を密に行うことで、重大な事案にならないよう図っている。今後とも教職員間の情報共有をすすめ、連携して素早い対応に努めていきたい。
	学校関係者評価委員会の評価	第1回学校評議委員会で、あいさつを課題としていたが、「自ら進んで挨拶をする」生徒の割合が6ポイント高くなったことは、学校の取組が実を結んだものである。多くの教員が生徒の様子をしっかりと把握することに努めていることは安心できる。		
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	生徒が主体的に挨拶ができるよう努める。生徒指導面では変化する時代に対応するため保護者との連携を密にしながら、生徒指導に対する理解を求めていく。全教員で生徒観察をしっかりと行い、情報を共有し問題行動の未然防止に努めていく。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
2 朝学習の充実と授業改善を進め、基礎学力の定着とわかる喜びや学ぶ意義を実感できるように努める。	① 研究授業や公開授業を積極的にを行い、授業改善に努める。	授業で生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組めなかった	AとBの合計 教員 80%	昨年度（66%）より14ポイント高くなっており、教員は意欲的に授業改善に努めている。今年度はコロナ禍のなかで、4・5月の休校期間もあったことから、学習の遅れを取り戻すために、創意工夫をし授業を行っていたことも要因として考えられる。引き続き、授業の工夫・改善を図り、生徒の学習意欲を向上させるよう努めていきたい。
	② わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	I C T機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	B (76%)	昨年度（70%）より6ポイント高くなっている。今年度は休校中にオンライン授業を試みたこともあり、教員のI C Tを効果的に活用することへの関心が高まった。現在のコロナ禍を考えると、今後、対面とオンラインを使いこなす方法について検討していく必要がある。
	③ 家庭での学習習慣の定着を図る。	家庭での平均学習時間が A 90分以上である（59.5%） B 70分以上～90分未満である（12.3%） C 55分以上～70分未満である（12.5%） D 55分未満である（15.7%）	定期試験前の学習時間が70分以上である生徒 71.7%	試験前は家庭学習は増えるものの、平日については少ない傾向が見られる。定期試験前の学習時間が70分以上の生徒の割合は、昨年度に比べ0.5ポイント増であり大差はない。課題を提供するなどして、家庭学習の定着に努める。
学校関係者評価委員会の評価	授業改善に取り組んでいる教員が多くなっており評価できる。I C T機器を効果的に活用するための準備などは大変だと思うが、生徒のためにわかる授業に努めてもらいたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	今年度はコロナ禍のため、オンライン授業などの必要性から、I C T機器を利用した授業改善に努めた。今後は、オンライン・対面授業のいずれにおいても、I C Tの効果的な利用に努めることが必要である。また、互見授業のあり方・意義を再確認し、わかる喜びや学ぶ意義を実感できるように授業改善を行っていきたい。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
3 自分を知り、社会を知り、将来の自分を考えることのできる生徒の育成に向け、キャリア教育の一層の推進を図る。	① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。	担任と生徒との1年間の個人面談回数が A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	面談を実施した回数(2月末現在) C	2か月間の休校期間があったため、前年度より面談回数は減っているが、1年生の系列選択、3年生については進路先がミスマッチとならないよう丁寧な対応に努めた。また、生徒の課題に応じ、スクールカウンセラー等の外部専門家を活用した面談も積極的に行い、効果的な指導を行うことができた。休校期間中は新しい取り組みとしてグーグルクラスルームを利用し、アンケート形式で生徒の様子を確認した。
		進路指導の行事や「産業社会と人間」・「総合的な学習の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった	AとBの合計進路を考える上で役に立ったと答えた生徒 90%	昨年度同様「進路を考えるうえで役に立った」と答える生徒が、全体の90%近くである。生徒には様々な活動を通して卒業後の進路を考えさせていきたい。また、生徒に身に付けさせたい力を教員間で共有し指導していき、キャリア教育の一層の推進を図る。
		四年制大学志望者のうち第1志望校に合格した生徒が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 学校推薦による就職希望者について、 A 10月末で100%内定を達成 B 11月末で100%内定を達成 C 12月末で100%内定を達成 D 12月末で100%内定に達していない	A (97%) D	四年制大学の第一志望校合格者は、昨年度より約16ポイント高くなり、おおむね第一志望校への合格であった。就職については、内定率100%に達する時期が遅れたものの、個々の生徒に応じた、粘り強い指導を行うことができた。今後の進路指導については、生徒により高い目標を持たせ、将来への可能性を大きくさせることが求められる。進路指導体制を点検し、進路実現の意欲と望ましい職業観の形成に努める。
	② 各種資格・検定試験に取り組む機会を設け挑戦する意欲を喚起する。	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 900人以上であった B 850人以上～900人未満であった C 800人以上～850人未満であった D 800人未満であった	新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が 843人 C	コロナ禍のため、中止となった検定等があり、昨年度より減少している。生徒の頑張り、教員の手厚い指導により、2カ月の休校期間の遅れを取り戻すことができた。第2種電気工事士の資格取得者は過去最高の31人であった。
③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。	提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった	AとBの合計保護者 91%	保護者の満足度は昨年度と同程度であった。教員は丁寧な面談を行うことで、生徒と進路についてよく話し合うとともに、保護者への連絡も丁寧に行っている。引き続き保護者との連絡を密にし、生徒の進路実現を目指したい。	
学校関係者評価委員会の評価	総合学科の特色や本校のキャリア教育の進め方について理解を深めることができた。生徒が主体的に学習に励んでいる様子も見られる。進学や就職者が混在するなかでの、進路指導は大変かと思うが、個々に応じた指導に努めてもらいたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	「産業社会と人間」・「総合的な学習の時間」の学習が、進路を考えるうえで役立っていると回答している生徒が多いことから、今後もキャリア教育の推進に努めていきたい。また、生徒を飽きさせないため、外部機関等とも連携しながら、生徒に刺激を与えていきたい。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
4 学校の活性化を図るために、部活動の活性化を目指すとともに、学校の魅力を発信する取組を充実させる。	① 部活動の活性化を目指し支援・運営する。	部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	B 1年 88% 2年 71% 3年 80% 全体 80%	部活動の加入率は昨年度実績（78.0%）より2ポイント上昇している。特に1年生の加入率が高く、全体を押し上げている。部活動指導にあたっては、生徒が満足感、達成感を感じられるように取り組んでいく。また、学校の活性化を図るためにも、部活動の充実を図りたい。
		部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	A 92%	部活動に対する満足度・達成感は、昨年度（90%）より2ポイント上昇し、例年、90%前後と高い。部活動指導の在り方を考え、日々の活動で生徒同士が切磋琢磨し満足感や達成感が得られるよう、さらに工夫をしていきたい。
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	休日も含めて年1回以上参加した生徒が A 400人以上であった B 300人以上～400人未満であった C 200人以上～300人未満であった D 200人未満であった	D 33%	今年度は、コロナ禍のなかで多くの行事が中止となったり、校外での活動が制限されたことで、昨年度(54%)に比べ、19ポイント下がった。このような中、東原町でのボランティア活動が評価され、石川県健民運動青少年ボランティア賞を受賞。今後も地域との連携を大切にし、生徒には地域行事やボランティアに参加する意義を唱え、自主的に参加することを促したい。
	③ 信頼される学校づくりに努める。	本校の教育活動を理解し満足している保護者が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	満足していると答えた保護者 B 80%	近3年間は、約80%であり、大きな変化はない状況である。さらに満足していただけるよう、保護者の皆様が学校に足を運んでもらう機会を増やし、本校の教育活動を理解してもらえるよう努めていく。また、ホームページも有効に活用し、随時、情報発信を行っていく。
		発信しているとする教員の割合が A 95%以上 B 85%以上95%未満 C 75%以上85%未満 D 75%未満	情報を発信していると答えた教員 A 98%	本校では、各教員がホームページなどを利用し、学校行事や部活動等、外部への発信を積極的に行っていることから、例年高い数値となっている。今後も情報発信を継続し本校の特色や生徒の活動を広く周知していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	3年間部活動に励んだ生徒が多いうえ、吹奏楽部の訪問演奏など地域に貢献する活動は評価する。「北陵高校は楽しい」との評判が立っている地域もあり、北陵高校の良さをより多くの方々に理解してもらうことが大切である。積極的にPR活動を行ってもらいたい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	部活動においては、顧問が生徒の様子をしっかりと把握し、生徒同士が協力して切磋琢磨できる環境整備を行うことで、生徒の満足感や充実感を高めるように努める必要がある。地域との連携を図るため、東原町でのボランティア活動など生徒自身が地域活動に参加する機会を提供していきたい。また、森本駅に新しく設置されたイベントスペースを有効に活用していくことを考えていきたい。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	判定	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（最善策等）
5 働き方改革における教員の意識改革と行動改革を進めるとともに、業務の平準化に取り組む。	① 月間や週間目標を設定し、それぞれが計画的に業務を進める。	時間外平均が、前年度同期より、 A 前年度より減少している B 前年度と同等または増加している	A R2年度 4～2月平均 31.1時間 R元年度 4～2月平均 43.4時間	今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、4、5月が休校となったことから単純に比較はできないが、教員の時間外勤務の縮減についての意識は変わってきている。月80時間を超える教員は減少傾向にある。引き続き教員のさらなる意識改革と業務の平準化に取り組み、勤務時間内で業務を終えることができるよう取り組んでいきたい。
学校関係者評価委員会の評価	教員の負担は大なるものがあると理解している。教員の方々の努力には敬意を表したい。コロナ禍のなか、生徒が多くの資格を取得できたことは、先生方の尽力によるものと考えている。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	教員の時間外勤務の縮減についての意識は変わってきていることから、引き続き教員のさらなる意識改革と学校として業務の平準化に取り組み、勤務時間内で業務を終えることができるよう取り組んでいきたい。今後も、PTA会議等を通して教員の働き方改革への理解を求めていきたい。			